

さらにその理論と理論家とを紹介し、最後にサンジカリズムが独立の運動としてまた理論として勃興した一九〇二年以来のその運動を説いている。

サンジカリズムに対する政府の態度、ゲジストや、ブルーリストや、アルマニストや、ブランキストや、またはアナキストとサンジカリストとの関係なども明白に記されている。

どちらかと言えば、僕はサンジカリズムの研究書としてこの本をもっとも推奨する。仏文で書いた書物の中でも、一冊ものとしてはあるいはこれに越すものがないかも知れぬ。

最後にちょっと書き加えて置くが、日本文で書かれたサンジカリズムの紹介としては、まず読むに足るものは、福田博士の『経済学研究』の一節と、米田庄太郎氏が『京都法学会雑誌』の六、七月号に寄せた論文の二つに過ぎない。米田氏はベルグソンとサンジカリズムの関係を紹介した、日本における最初の人であろう。

『現代八面鋒』（久津見巖村著）

先きに『人生の妙味』を公けにして、ニーチェの『ツアラツストラ』を説き、不幸政府の忌諱に触れてその発売を禁止せられた著者が、その後久しく病床に横たわって、八ツ当りに当たった気焔録である。世界の問題、時代と人物、現代小観の三篇に分ち、なおその各篇に十数の論文雑録を収めてある。後の二篇の中にも多少著者の主張の現れていないこともないが、恐らくは第一篇の中の夢の道士の研究や、シャボン玉の宇宙観やまたはわが神学小史などをもって、著者をもっとも苦心の作と観ねばなるまい。

夢の道士の研究は、ニーチェの新しい研究である。シャボン玉の宇宙観は、「世界は種々雑多の物類の群生変化しつとあるところである。吾人には測り知れぬ連続である」という多元的見解から、「世界の实体は絶対——神——である、万物はその部分でつまり絶対の表現したものである」という汎神論に痛棒を加えた著者の哲学観である。そしてわが神学小史はまた、幼

年時代の無意識の多神論から、児童時代の無意識の多神教となり、少年時代の独断的無神論となり、さらに青年時代の半ば意識ある有神論となり、ついに転々して今日の意識ある無神論となった著者の思想史である。

この三文章を始め、なおルソー二百年記念会のごとき、超人と南京瓶のごとき、また歴史の陰影のごとき、いずれも強烈なるニーチェイズムの現れならざるはない。子供がおもちゃを遊ぶように、何でも新しいものばかり夢中になって、それも一日か二日であっちゃんやってしまう今の日本の思想界において、著者が十年一日のごとく、ニーチェの真面目なる祖述に従っているのは、珍しいことと言わねばならぬ。

ただ著者はニーチェと社会主義とを無暗に反対させようとしているが、どこの国の社会主義新聞でもみなニーチェの著書をその読者に推奨して、そして超人は社会主義の理想であると言っている事実をどう説明するのだろうか。ニーチェはもとより社会主義者じゃない。けれども社会主義者は、さほどにニーチェに反対するものじゃない。(価金八十銭小石川区原町丙午出版社)

『社会主義倫理学』

「人間が社会的にその衣食住を生産するには、知らず知らずの間、必然的にある種の間係を作る。その関係はすなわちその社会における物質的生産力の発達程度に相応する生産関係である。この生産関係の総和が社会の経済的構造、すなわち真実の基礎をなすもので、この基礎の上に、法律のおよび政治的の上建築ノイベルバウが組立てられ、またこれに相応してある種の社会的自覚が生ずることになる。」

この唯物的史観説は、マルクス自身も言っているがごとく、歴史の一導線ライツラインである。しかももっとも主要なる一導線である。この条件でいる間、この史観説もはなはだ有力なものであるが、それを外れるとすこぶる滑稽なものになってしまう。そしてとかく社会主義者の間には、この誇張者が多い。

カール・カウツキー著『倫理と唯物的歴史観』(堺利彦訳『社会主義倫理学』)は、この一導

線によって、過去の諸倫理学説と諸道徳行為とを批判し、さらに進んでその史観説独特の道徳理想を闡明したものである。

第一章「古代およびキリスト教の倫理」は、哲学史上何故に倫理問題がベルンシャ戦争のすぐ後に起り、この個人生産時代において何故にエビキュラス派とプラトン派と相対立して、その中間にストイック派が現れたか、そしてまた何故に、この後の二者が要素となってキリスト教を生じ、ついにエビキュラス派の唯物論を征伐してしまつたかを述べ、その間に神の思想の進化や、二重道徳や、倫理と道徳の關係に論及している。

第二章「啓蒙時代の倫理」と第三章「カントの倫理」とは、十八世紀以来の資本家制度の発達とともに、いかにして新科学たる経済学が起り、また何故に仏国には革命的唯物論が起り、英国には唯物論とキリスト教の調和論が起り、そしてドイツにはきわめて深遠なる抽象的哲学が起つたかを説き、いわゆる国民性論者の蒙を啓いて、詳細にカント説を批評しつつ、ついに唯物論と唯心論の論点たる「自由と必然」とを論じ、あわせて近時何故にカント説が再び頭をもたげて来たかを述べている。

第四章「進化論の倫理」と第五章「マルクス派の倫理」とは、いっさいの超自然的解釈を排除して、社会的本能によって道徳法を説明し、生産關係によって道徳理想を決定した、本書中の本論とも言うべきものである。

論旨きわめて徹底、訳文もまたきわめて明晰、とうていブルジョワジの学者輩に望むべからざるものがある。

最後になお僕は、この唯物的史観論自身ために、一言弁じて置く。

「人の自覚によってその生活法が定まるのではなく、その反対に、人の社会生活によって自覚が定まるのである。」けれどもこの自覚が社会的生活の上に反動することもまた大きい。さればこの書の著者も、強力や思想の差異を史観説から排斥してもいるが、一面にはまた、「道徳的規範を理解するには、それを呼び起した社会的要求を知るのみならずまたその社会の特殊なる思想を知らねばならぬ、生産方法は決してその当時の特殊なる器械と特殊なる社会關係とのみによって決せられるものではなく、またその特殊なる智力と特殊なる因果の推理と、特殊なる論理と、すなわちこれを一言にすればその特殊なる思索法によって決せられる」と言っている。(訳書二二一ページおよび二二六ページ参照)

これを要するに、この新唯物論はいわゆるただの唯物論、すなわち死んだ唯物論じゃない。従来よりも一層善く歴史を説明するといふだけじゃない。この史観説によって初めて道徳理想が闡明せられると言うがごとく、また実に従来よりも一層善く歴史を作るに足るものである。かくして社会主義の物質論は一躍して絶大なる理想論となる。(金一円丙午出版社)

『現代思想講話』（大住嘯風著）

ジュームスとオイケンとベルグソンとを主として、なおそれらの人々の思想の伝統を記述したものである。お馴染の本屋さんにはなほだ相済まないが、少々悪口を言わして戴きたい。もっとも僕はメタフィジックのことは門外漢だから、その方のことはたぶん著者が間違いのない巧みな紹介をしているものと譲歩をして、そして、僕自身の専門のことについてのみ悪口を叩いて置く。それは第十六章「アンリ・ベルグソン」の中の第三節「ベルグソンと労働問題」の一項である。

ベルグソンはサンジカリズムの「知力的本尊」じゃない。もっともソレルなどはしきりにベルグソンを担いでいるが、サンジカリズムそのものとその一理論家ソレル輩との間に、明白な区別をして貰いたい。サンジカリズムは労働者が日々の生活と闘争との経験から、自ら一歩一歩築き上げて来た運動である、理論である。そしてソレル輩の学者等は、その運動や理論の大

体の輪郭ができた時に、横町から出しゃばって来た好奇者どもである。このソレル輩を「この運動の首脳」としたところなどは、実に滑稽極まる。労働者の心理は諸君紳士閥の心理と違って、ある一人の人を本尊とし首脳とするような暗愚庸劣な考えを持っていやしない。

ソレルやベルトが「実際のサンジカリズム」を唱えているとは何のことだい。著者はいつか『万朝報』の論文で「一般民衆」にルビをふってブルジョワとしたほどの学者なのだから、あるいはシオリチカルを実際のと訳したものと見れば、まんざら想像のつかぬこともない。ついでに言うが、ヴェルト (Verth) はバルト (Berth) の間違いだらうね。ずいぶんお苦勞なことをしたものだ。

サンジカリズムは仰せの通り「せっぱつまった労働者の運動」である。しかしこのせっぱつまるといふことには、甚大な意味を含ませて貰いたい。何故せっぱつまらせられたかを十分に考えて貰いたい。「悪く解すれば躁暴にして乱雑なる運動」などと、ただ表面に現れた最後の事実のみを観て、ことさらに悪く解することなどは、学者の態度として控えて貰いたい。もっともこの著者には学者の態度などということとは、もともと分っていないようだ。せっぱつまった真剣の労働者の運動を批評するのに、「吾人の趣味から論ずればはなはだ憂うべくかつ忌むべき」などと来るのだから堪らない。なるほどブルジョワジーを一般民衆と心得、したがってプロレタリアを一般民衆の仇敵と認めている著者の趣味からは、そう来なくちゃなるまいよ。

僕は、著者が本当にサンシカリズムを理解するようになるために、'The Labour Movement in France, a Study in Revolutionary Syndicalism, by Louis Levine, ph. D. 〇一読をおすすめして置く。

以上は先きにも言ったごとく、本書中のわずかに数ページにわたったただ一節、しかもホンの挿話ともいふべき部分に対する批評に過ぎない。本書の全体に対しては、ジェームス、オイケン、およびベルグソンの纏った最初の紹介として、現代思想に生きる人々のために推奨して置く。(金一円二十銭小石川区原町丙午出版社)

『大日本閨門史』(白柳秀湖著)

『親分子分』の「英雄篇」の時にもちょっと言って置いたが、由来秀湖の著書は、序文が少しえらすぎる。もう少し露骨に言うとな法螺を吹きすぎる。この『閨門史』の序文には、比較的に本文に対する法螺は少ないようだが、そのかわり御自分に対する法螺が、大分鼻をつく。

本書は、まず原始時代の男女関係とおよび婦人の地位とについて、人類学的社会学的の予備知識を与えて、後おもむろに日本婦人の社会的地位を、神代から徳川の初期にわたって、稗史的に、かつ多少の系統を与えて叙述したものである。母主的家族時代、自由結婚時代、唐風模倣時代、過渡時代、婦人道德萌芽時代、婦人の絶対的服従、婦人道德の固定の七章に分ち、その間に、盛んに、三面記事のみだしを並べて、例の絢爛華麗の筆致で、八百ページ弱の大冊を、何の苦もなく、すらすらと読ませる。この手腕だけは、何人といえども、まあ買ってやらなければなるまい。

厳正な科学的意味で、「史」と言えるほどのものではないが、読んで面白いことこの上もない。(金二円五十銭、神田鍛冶町東亜堂)

『オイケン哲学の批難』(古谷栄一著)

今まで何処へも名を出したことの無い無名の一青年が、自己発表の第一声として、恐ろしい気焰をあげたものだ。しかしこの気焰は、著者の全身の中に白熱して燃えている。そしてその触れるところのほとんど何ものをも焼き尽さねばやまぬ、生命の火から出た気焰だ。僕はまだ、少なくとも日本人の書いたもので、これほど力強いそして底深い、メタフィジカル・スピリットの発現を見たことがない。僕はこの書を読みながら、僕自身がヒシヒシと圧迫されるのを感じた。

オイケン哲学の批難ではあるがオイケンなどはどうでもいい、この俺を見てくれ、というふうに、著者はほとんどいたるところにその自己を、「未だ地上においてかつて何人もなさざりしほどに強烈に握りしめた」そして「その正体へ喰いついた」と「誇負」している自己を、本当に青年らしい仕方で投げ出して見せている。そしてこの不意に投げ出された著者の「自己」

の前に、僕は周章てて圧しつけられてしまったのだ。

これだけのことを言っただけでは、勿論読者には、この書の内容の分る筈はない。しかし僕は今、それを紹介し、もしくは批評する余裕をもたない。そこで止むを得ず、この天才らしい著者が僕におっかおせた圧迫の感だけを記して置く。そしてこの偉大らしいメタフィジシアンメタフィジシアンの出現を見るために、何人もこの書を一読するの要あることを附記して置く。(金一元二十銭、東京神田区表神保町東京堂)

『新しい英字』

前ジャパントタイムス記者岩堂保氏と、ジャパントタイムス学生号主任森浜五郎氏との共著で、『新しい英字』と題する辞書が出版された。序文によれば「英米発刊の現代の著書、雑誌、新聞を読むに当ってしばしば遭遇し、また普通の教育ある英米人が日常口にするきわめて普通の字句はほぼ九百を精選し」かつ「世界最新の大辞典ニュー・スタンダード・ディクショナリー」と一字一句対照考査し、その解釈の正確なることを保証」されたのである。

僕は今この辞書の全体を批評もしくは紹介しようとするのではない。ただその中に僕等の主義主張と関係のある三、四の字句があるので、それを抜書しつつ、なお多少の註釈を加えて見たいと思う。小辞書のことだから不十分は仕方がないとしても、中には大おひどく間違っているところもある。

第一にサンジカリズムの項を引いて見よう。

「産業革命主義。仏語より採用せし文字。現在の産業組合を拡大しかつ連合して、ストライキをもっとも有効なる武器となし、連合的ストライキによって彼等の主張を貫通せしめ、今日の資本家制度の産業を労働制のものに改造せんとする主張なり。」

産業革命主義と訳したのはあまり感心しない。僕はやはり文字通りに労働組合主義と訳した。語源の Syndicat は労働組合の意だ。定義もはなはだまずい、しかし当たっていないことはない。今手近の本を引出していろいろ調べて見たが、簡単に要領を得た定義は一つも見当らない。僕自身にも今ちょっと立派な定義は作り得ない。そこでフランスの労働総同盟の憲法ともいべき一言の冒頭をここに掲げてその性質を明らかにして置こう。

「労働者は、自らが犠牲になつてゐる掠奪を、単独の力で軽減することを望み得ない。

「また政府者にわれわれの解放を期待するのは妄想である。よし政府者がわれわれに対して最善の好意を懐いてゐるとしても、彼等は確実なる何事をもなし得ない。われわれの運命の改善は彼等政府者の権力の減退と正比例する。」

「近代工業の結果、および権力が生産機械や土地の所有者の当然の支柱となる結果、資本と労働との間に不断の軋轢が生ずる。」

「そしてこの事実から、まったく相異なるかつ調和すべからざる二階級が対峙することとなる。一方には資本を所有するもの、他方にはいっさいの富を創出す生産者、すなわちこれ

ある。資本は労働の頭をはねて初めて成立するものである。

「されば労働者等は、『労働者の解放は労働者自らの仕事でなくてはならぬ』という、万国労働者同盟の原則を実行することをもって、その任務としなければならぬ。」

「この目的を達するためには、あらゆる形式の団体の中で、労働組合がもっとも善い。労働組合は、共通の敵に対して被掠奪者を團結せしめる、利害の団体である。したがってその中には、いかなる哲学的政治的または宗教的意見を有する生産者をも、すべて包含し得る。」

「しかしもしこの労働組合が孤立していれば、必然に孤立の一労働者と同じ（もっとも度合は違ふが）誤謬に陥らなければならぬ。また一致共同の実行にも背くことになる。さればいっさいの生産者はまず労働組合の中に團結し、それが実現されたら、さらにその労働組合を地方連合に加入させ、また同業同盟を通じて労働総同盟に加入させ、もつてその労働組合事業を完成しなければならぬ。」

「この条件によつてのみ、初めて労働者は、賃金制と雇主制との完全なる絶滅に達するまで、その雇主者に対して有効に戦うことができる。」

すなわち労働組合主義とは、いっさいの他の仲介に依頼することなく、ただ労働者の組合的團結の力によつて、賃金制と雇主制との絶滅に達せんとする一運動である。

なおこの『新しい英字』のサンジカリズムの項には、次のごとき四つの例が和訳付の英文で

挙げられている。訳文もはなはだまずく、かつたとえば例一のごとくよほど妙なことも書いてはあるが、ともかくもここに写し抜いて置こう。

「例一、産業革命主義とは、一の職業にて同盟罷工をして、他の職業者をも同盟罷工するよりに誘導するを言う。」

「例二、産業革命主義とは、諸種の産業組合の働きによりかつその統治の下に、永久幸福の時世を実現せしめんとする一種の方法である。その準拠する根底の所論は、労働社会すなわち第四階級のために正義を確保する唯一の道は、労働社会自身の独立的かつ強制的努力にのみよると言うにあり。」

「例三、不撓の産業的戦闘てう根本的経済主張を終始保持するためには、産業革命者は政治に対して反抗的態度を採ることは止むを得ざることなり。」

「例四、日本の眠れる資本家は、ある朝起きて、彼等の工場、作業場等が、多くの人に包囲され居るを発見すべし。その人たるや、昨日までは資本主の雇人たりしものにて、今日は彼等自ら主人とならんことを主張している。その時において日本は、初めて産業革命運動がすでに資本主の支配権の範囲外に進行せることを知るべし。」

なおこの辞書には、新語として普及されているものではないが、この春項大ぶイギリスの新聞雑誌に歌われた、ラーキニズムの語が載っている。これは当時ダブリンで大ぶ乱暴な同盟罷

工をやつて、一時にその名を挙げたラーキンの主張を指すものである。ラーキンは自ら労働組合主義者とも名乗っていないようだが、その主張はほとんどそれに近い。『新しい英字』には次のごとく記してある。

「ラーキン主義、労働革命。アイルランド人ジェームズ・ラーキンの名と *ism* (主義) とを結合せし字。ラーキンは労働社会こと下級労働者の自由および安寧のために、自ら指導者として暴行的同盟罷工を行い、政治を無視し暴行をもってその主義目的を達する唯一の方法となす。」

「ラーキン主義は旧式の産業組合と戦うとともに、また資本家とも戦う。その主義たるや、政治的方策を斥け、同盟罷工をもって労働者解放の唯一の方法なりと主張す。同情的(共同的)同盟罷工はラーキン主義の唯一の武器なり。」

これにも註釈と訂正とを加えたいが、次のサポタージュに急ぎたいので、略して置く。

二

いずれ著者等は何かの憑拠があつて書いたものだろうが、このサポタージュの語については、まったく間違つた解釈をしている。

「鉄道運輸妨害、暴力ストライキ。仏語より採用せし字。元来は鉄道の枕木ヘレールを据え

附くる溝を作る意なり。それより転じて線路に障害を作り鉄道運輸に妨害することに用う。」

こゝまでは「仏語より採用せし字」の一句を除けばまるで間違いだ。しかしそれは後で言うこととして、ともかくも辞書通りに続けよう。

「この意よりさらに転義して不満の労働者が暴行手段をもってストライキすることを言う。また暴行を煽動することにも用いられる。さらに新しくは労働者が工場等を破壊することを言う。」

「ブリアン内閣の立法せし反同盟罷工法文中、サボタージュなる語を定義して曰く、作業、工業または商業を阻止しまたは妨害するの目的にて諸器具またはその他の物品を故意に破損しまたは用をなさざるに至らしむることなりと。」

なるほど仏語のサボタージュには、鉄道の枕木ヘレールを据え附ける溝を作るという意味もある。しかしその他に木靴を作るという意味がある。そして労働運動の場合に使われるサボタージュの語は、この後者の意味の語源 *Sabot* (木靴) から転訛したものである。

このサボタージュの語は初め「木靴で蹴るように仕事をする」という意味の隠語であった。木靴とは文字通り木で造った靴で、フランスの農夫などがよく用いている。このだぶだぶした妙な靴をはいて蹴ったところで、ろくな蹴りかたはできない。フランス語のラルウスの大辞典にも、明らかにこの意味で書かれている。

この運動方法は、もとより他のいっさいの叛逆形式と同じく、人類が人類を利用掠奪する最初から行われた。しかしそれが組織立った理論として現れたのは、一八九五年イギリスで発刊された小冊子『ゴオ・カンニイ』に始まる。サボタージュはこのゴオ・カンニイの理論をそのまま借り来たったものである。ゴオ・カンニイはまたカ・カンニイとも言い、スコットランドの俗語で「ゆっくりやる」の意味である。左にその小冊子の一節を抜いて、この理論の概要を示す。

「二円の値段の帽子を買おうと思えば、二円払わなければならぬ。」

「もし一円しか出すまいと思えば、もっと悪い品の帽子で我慢しなければならぬ。」

「帽子は商品である。」

「一円のシャツを半ダース買おうと思えば六円払わなければならぬ。しかるに五円しか出すまいと思えば、そのシャツを五枚しか買えない。」

「シャツは商品である。」

「雇主は言う、労力や熟練は、帽子やシャツと同じく、商品に外ならぬと。」

「そこでわれわれはそれに答えて言う、よろしい、お言葉通りにいたしましょうと。」

「もし労力や熟練が商品であれば、この商品の所有者は、帽子屋が帽子を売りシャツ屋がシャツを売るとまったく同じように、その労力や熟練を売る権利がある。」

「商人は値段次第に売る。安ければ品物が悪いかあるいは数が少ない。

「諸君が労働者にいい賃金を払えば、労働者は諸君にもっといい労力と熟練とを供給しよう。」

「もし諸君が労働者に十分な賃金を払わなければ、諸君は一元出して二元の帽子を要求する権利がないと同じように、またいい質と量との労働を要求する権利がない。」

すなわちゴオ・カンニイとは、「安かろう悪かろう」の定則を組織的に応用したものである。しかしただこれだけのことではない。さらにこの定則から、資本家の貪慾と戦う労働者の意志の種々なる表現が分れ出た。そしてこのゴオ・カンニイすなわちサポタージュは、生産を遅らすことと粗雑に生産することの外、さらに商業にも及び、ついに生産機械の破壊にまで進んだ。

これだけのことが分らないと、『新しい英字』の著者等のごとく、いい加減な出鱈目を言うようになる。

まずは御注意まで。

解説／大沢正道

この巻は、社会哲学的な認識と思想方法論を主題とする論文、および同時代人に対する論争的な評論その他を収録した。一九一三年（大正2）から二二年（大正11）、年齢でいえば二八歳から三七歳の十年間にわたって書かれたものである。

大杉の哲学ないしは思想は、いっばんに「生の哲学」の一種とされている。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて流行したいわゆる「生の哲学」は、ショーペンハウアーを祖とし、ニーチェ、ベルグソン、ディルタイ、ジンメルらによって代表されるといわれている。それはこんにちの実存哲学のような位置を、当時の哲学思想界で占めていたのである。

俗流マルクス主義者たちは、これまで唯物論対観念論の図式を機械的に適用して、「生の哲学」は観念論であり、したがってブルジョアないしブルジョアの哲学である、したがって、その立場に立つ大杉のアナキズムは必然的にブチブルジョア急進主義にすぎぬ、と片づけ